

平成17年9月6日大水害

あれから10年

教訓は生かせるか：

>1<

五ヶ瀬川、耳川水系など県内各地に大きな災害をもたらした平成17年9月6日の台風14号水害。あれから間もなく10年の節目を迎える。

防災・減災を考える
シンポジウムから――

九州西岸を北上する台風14号の影響で県内は9月3日の夜から7日未明にかけて断続的な雨に見舞われた。延岡は5日夜から1時間当たり35ミリの雨脚が強まり、6日は未明から夜にかけて12時間以上にわたり50ミリの激しい雨が続いた。5、6日の2日間で県の年平均雨量の約半分に当たる1200ミリの降雨となった。

山間部も見立(日之影町)で1200ミリの雨(南郷村)当時

九州西岸を北上する

で1321ミリの記録。五ヶ瀬川、耳川は計画水位を超え、至る所で氾濫した。延岡市では堤防5カ所で越水、濁流が市街地に流れ込んだ。日之影町や北方町役場(当時)は床上浸水して機能停止した。日之影町は山崩れが民家を襲い、川のそばの家は濁流に流された。

9月12時間以上も50ミリの雨

前日からの雨量 県年平均の半分も

北方町(当時)川水流、曾木地区なども住宅が浸水し、所々で取り残された住民が孤立した。椎葉村では山崩れの土砂が村の中心部を襲った。諸塚村では耳川沿いの商店街が濁流にえぐられるように破壊された。県内は死者13人、負傷者26人、全壊家屋1136戸、半壊3381戸、一部損壊306戸、床上浸水1405戸、床下浸水2958戸と激甚な被害(件数は県発表)を受けた。

その後、国土省の五ヶ瀬川河川激甚災害対策特別緊急事業をはじめとする災害復旧工事が進められた。行政による防災情報の発信や自主防災組織の結成などハード、ソフト両面で災害対応力が強化された。特に近年は、全国

10年前の台風14号では延岡市中心部の大瀬川左岸堤防も越水し始め、土のうで浸水を食い止めた(平成17年9月6日午後2時50分ごろ、桜小路から大瀬橋方面を撮影)



平成17年台風14号の洪水で流失した旧高千穂鉄道の鉄橋。廃線への引き金となった(延岡市北方町川水流側から撮影)



的に局地的豪雨が発生しやすくなっているとされる。県北にも今後いつまた同じような自然災害が襲ってくるか分からない。

その時、われわれは10年前に起きた大災害の教訓を生かせるだろうか――。

今月14日に延岡市野口記念館で「のべおかの防災・減災を考える

シンポジウム」が開かれ、来場者は防災への心構えを新たにしたい。シンポジウムでは、有識者や当時災害対応に当たった人たちがそれぞれに過去の災害を振り返り、これからの備えを提言した。その講演やパネルディスカッションの様相を紹介したい。